

聖書のメタファー分析

橋 本 功・*八木橋 宏勇

1. はじめに

イスラエル民族の伝承物語である Tanach は長い期間を経て文字化された。「モーゼ五書」(Torah)について言えば、Jahwist 資料は紀元前 930 年頃に、Elohist 資料は紀元前 900-850 年頃に、Deuteronomist 資料は紀元前 722-622 年頃に、Priest 資料は紀元前 550-450 頃に、それぞれ、古代（聖書）ヘブライ語によって文字化された (Gottwald, 1987: 137-41)。これらの伝承物語は伝承の過程で異なる時代に異なる人々によって手が加えられ、文字化する際にはそれぞれの時代の文化に基づいた表現が付加されたと考えられる。突然変化する文体や語彙、物語の重複、複数の神の名前等がそのことを示唆している (Davidson, 1973: 2-12)。Tanach は、キリスト教成立後、キリスト教側から「旧約聖書」と名付けられ、キリスト教の広まりと共に世界中に流布し、多くの言語に翻訳されてきた。数千年も前にパレスチナ地方で創られ、口承時代を経た後、セム語族の言語で書き留められた旧約聖書を現代に生きる我々はどのようにして読み解くことができるであろうか。本稿の目的は、しなやかな思考能力を持つ「人間」を中心に据え、「メタファー」¹という認知言語学的視点からこの問題の分析を試みることである。

2. 認知能力としてのメタファー

וַיֹּאמֶר אֱלֹהִים יְהִי אֹור וַיָּהִי אֹור (Gen. 1:3, NKJ: Then God said, "Let there be light"; and there was light.) これは天地を創造するために神が行った最初の仕事を描写した箇所である。אֹור (光) がなぜこの世の〈誕生〉を含意するのであろうか。これには我々の経験によって動機付けられたメタファーが深く関わっている。人間は母親の胎内、つまり太陽光が直接届かない闇から抜け出ることによってこの世に誕生し、光を体験する。〈光と闇〉はそれぞれメタファー的思考を介して〈存在と非存在〉を示している。「光が当たる」はその存在を強調し、「闇に葬る」はある存在を非存在にすべく覆い隠す。(Gen. 1:2, NKJ: The earth was without form, and void; and darkness was on the face of the deep.) これは光が誕生する以前の闇の状態を描写した箇所である。〈非存在〉がךשׁך (暗闇) で表現されている²。

以降、認知能力としてのメタファーを「メタファー」と「メトニミー」に細分して、旧約聖書の表現を分析する。

* 慶應義塾大学大学院文学研究科後期博士課程

¹ 狹義の「メタファー」は類似性に基づく写像を指すが、広義には「メトニミー」「シネクドキー」「メタフトニミー」などを包含する比喩表現の総称で用いられる。ここでは後者の意味で用いられている。

² 英語でもこのメタファーは観察される。言語の相違にもかかわらずこのような一致がみられるのは、それを用いる人間が共有する経験がメタファーの基盤となっているためである。E.g., bring something to light ⇔ be in the dark

2.1. メタファー

生まれて間もない子どもは、母親の母乳と他人のそれを区別することができ、また見知らぬ人に抱かれると泣き出す。人間には複数のものを〈比較する〉という能力が備わっており、その過程で〈類似点〉や〈相違点〉を軸にカテゴリー化を行っている。関連性がないものよりは関連性があるものに意識を向けやすく、比較に際し何らかの〈類似点＝共通点〉を基に両者を関連付けようとする。このような認知過程がメタファーの基盤である。それは単に言葉だけではなく概念に関わる問題でもある。例えば、物を積み上げていくと高さが上がっていくという物理的な経験から *MORE IS UP, LESS IS DOWN* (Lakoff and Johnson, 2003: 15-16) という概念をイメージとして蓄積している。この概念メタファーを個別の事例に適用することによって具体的な表現が創出される。My salary is *high / low*. The temperature is *high / low*. がその例である。

メタファーとは、ある概念領域、すなわち目標領域 (target domain) に属する事物を類似性 (similarity) に基づいて別の概念領域、すなわち起点領域 (source domain) の事物から理解する認知的な喩みである。一般には、抽象的なものをより具体的に表現するものと言われている。例えば、抽象的な概念である「時間」を〈大切なものの〉という共通点を軸にして具体的な「お金」に喩え、「時は金なり」、「時間を浪費する」、「時間を節約する」、「時間を使う」といった類の表現が生み出される。同様に「人生は旅である」という表現は、一見捉えどころのない「人生」を〈出発 → 道中 → 到着〉というプロセスを持つ「旅」に喩えることによって、〈誕生 → 成長 → 死〉と構造化することができる。また、「旅」にまつわる「出会い」、「別れ」、「楽しみ」、「発見」、「困難」、「哀愁」といった様々な側面が人生の「喜怒哀楽」というイメージとして写像される。

メタファーによるイメージの喚起を利用した表現は、抽象的なものを具体化させる場合にのみに利用されるものではない。「地球がくしゃみをした」は、「地震」を「地球のくしゃみ」に喩えた一文である。これは次のような類似性を軸に展開されたメタファーである。

1. 地球は〈生きている〉 ⇄ 人間は〈生きている〉
2. 地震は〈一瞬〉で地面を〈動かす〉 ⇄ くしゃみは〈一瞬〉で体を〈動かす〉
3. 地震はエネルギーの放出〈内から外へ〉 ⇄ くしゃみは呼息を発する〈内から外へ〉
4. 「地球がくしゃみをした」

このメタファーによって、例えば「くしゃみ」の〈瞬発性〉や〈治療の必要性〉等が、「地震」に付随する〈突発性〉や〈復旧の必要性〉という側面をイメージとして喚起させる表現となっている。

以上のことから、メタファーは異なる領域に属する複数の事柄を「起点領域」から「目標領域」へ〈類似性〉を介して写像する認知過程であることが明らかになる。起点領域が保持する様々な側面が目標領域に構造を与え、イメージの喚起を引き起こしているのである。我々が経験を概念化しないならば、メタファーは機能しない。このことはメタファーが〈身体〉、〈文化〉、〈時代〉、〈信条〉、〈社会〉といった我々を取り巻く〈環境〉と深く関わっていることを示している。同じ人間であるがゆえに、身体に由来するメタファーには普遍性が認められ

るものがある。一方で環境が異なれば必然的に経験することも異なる。その結果、メタファー表現にも多様性が生まれることになる。

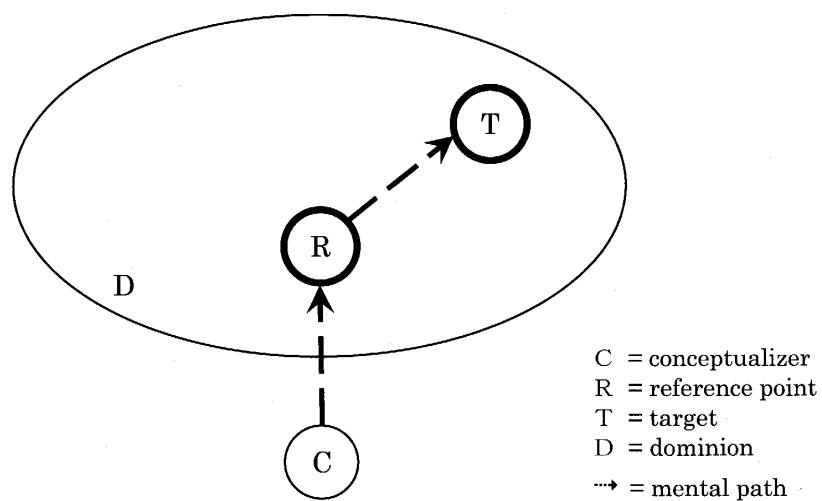
2.2. メトニミー

メトニミーは一般的には〈隣接性〉(contiguity)に基づく比喩である。代表的な例に以下の表現がある。

【隣接関係】

- | | | |
|-------------------------------------|-----------------|----------|
| 1. The <i>kettle</i> is boiling. | (やかんが沸騰している) | 《容器と内容物》 |
| 2. We need more <i>hands</i> . | (もっと手が必要だ) | 《部分と全体》 |
| 3. I work in <i>Wall Street</i> . | (ウォール街で働いている) | 《場所と機関》 |
| 4. They <i>buried the hatchet</i> . | (仲直りする) | 《行為と結果》 |
| 5. I bought <i>Shakespeare</i> . | (私はシェイクスピアを買った) | 《作品と著者》 |

メトニミーが基盤とする隣接性は空間的、時間的、因果的に隣接している複数の要素と関わっている。実際に沸騰するのは「やかん」ではなく、また「手」だけを借りるのではない。それぞれ空間的に隣接した「やかんの中の湯」、「手伝いをしてくれる人間」を意味する。さらに「ウォール街」という地名で「金融市場」を意味するのは、両者の空間的な隣接性によるものである。「斧を埋める」という表現は、武器を埋めて争いが収まった後の状態を描写している。類似の表現「矛を納める」が日本語にもある。これらは時間的かつ因果的な隣接性によってもたらされる解釈である。また「シェイクスピア」本人を購入することはできない。この場合は、「作者」と因果的に隣接している「作品」すなわち「シェイクスピアが書いた本」を指示している。



上図は Langacker (1993: 6) による「参照点構造」(reference-point construction) を示している。人が事物を認知する場合、捉えやすいものと捉えにくいものとがある。その場合、認知的に際だちが小さいものに対しては、隣接関係にある際だちのより大きいものを介して

アクセスするという方略が採られる。つまり概念化者 C (conceptualizer) があるターゲット T (target) に言及する際、より捉えやすい事物を参照点 R (reference-point) として経由し、同一の領域内 D (dominion) にあるより捉えにくいものにアクセスするという心的動作が行われる³。参照点構造における支配領域 (D) は、概念化者が身を置く環境に強い影響を受けて形成されるあるカテゴリーの範囲を示している。メタファーとは異なり、メトニミーは単一の領域内で機能している。先に挙げた例はどれも参照点を経由した2段階の心的動作を経ることによって解釈が可能になる表現である⁴。

我々は日常生活の中でも参照点構造を様々な場面で利用している。目的地にたどり着くために目印となる建物を参照したり、大事な箇所には赤線を引いて明確にしたりするのがその一例である。このように隣接性と参照点構造という心的動作に基づくメトニミーは重要な認知能力の一つである。

3. 事例研究

先に述べたように、メタファーとメトニミーは書き手の経験的知識に基づくために、これらを他の言語へ翻訳するという作業には何らかの問題が生じる可能性がある。言語は文化、時代、社会、信条が反映されたものであり、それぞれの文化には独自のアイデンティティがある。以後、これらを総称して「文化」と呼ぶ。翻訳は原文と訳文の「イメージの喚起まで含めた理解価値の等価」(成瀬, 1996: 1) を追求するものであるならば、そこには言語の文化的側面が当然立ちはだかる。例えば日本語では「八重歯のかわいい女の子」(*ibid.*: 106) と言うことができるが、欧米で八重歯 (double teeth) は吸血鬼をイメージさせるために直訳することはできない。語感に対する配慮が必要になるからである (*ibid.*: 1)。同様に聖書の翻訳には「できるだけ原典の言語表現や表現形式を翻訳する側の言語に伝えようとする力が働く」(橋本, 2005: 190)。そのために、訳文だけではニュアンスを捉え切ることは困難な場合もある⁵。このような問題点を考慮に入れた上で、聖書の表現を認知言語学の観点から分析する⁶。

3.1. 概念レベルで普遍性が見られる事例

言語を詳しく観察すると、時代や文化を越えたある一定の枠組みに沿った表現が存在することに気づく(Sweetser, 1998: 45)。日常の経験から得られる情報を分類して体系化することによって共通要素を抽出し、新しい表現を生み出すとともに解釈の枠組みを提供するもの、それが概念メタファーと概念メトニミーである。

³ 図中の点線矢印は、概念化者の注意・意識がたどる心的経路 (mental path) を示す。楕円形 D は支配領域 (dominion) で、参照点を経由してアクセス可能な範囲を表している。

⁴ 例に挙げた隣接関係は以下の通り。

- | | | |
|--------------|------------------|--------------------------------|
| 1. 「やかん」 | → 「やかんの中の湯」 | (内容物より容器のほうが認知しやすい) |
| 2. 「手」 | → 「人間」 | (作業する場面では実際に作業を行う手が認知的に際だっている) |
| 3. 「ウォール街」 | → 「金融市場」 | (公共性のある地名の方が機関より認知しやすい) |
| 4. 「斧を埋める」 | → 「仲直りする」 | (視覚的に捉える行為の方が関係よりも認知しやすい) |
| 5. 「シェイクスピア」 | → 「シェイクスピアが書いた本」 | (様々な種類がある本よりも作者の方が認知しやすい) |

⁵ 例えばヘブライ語の複数形には「尊敬」や「広さ」を示す用法がある(橋本, 2005: 197)。

⁶ 例文に付された下線、斜体はすべて引用者による。

3.1.1. 事例 1 — *his countenance fell / lift up thy face*

ここでは方向性のメタファーが関わる表現を見ていく。

| | | | |
|-------|--|---|-------------|
| (1) | وַיַּפְלֹּֽן פָּנָיו | וַיִּחַר לְקַיֵּן מִאָרֶךְ | (Gen. 4: 5) |
| | B | A | |
| | (and he fell face-of-him) | (and anger-was-kindled to-Cain exceedingly) | |
| (1') | Cain was very wroth, and <i>his countenance fell</i> . | (AV, Gen. 4: 5) | |
| (1'') | Cain was much distressed and <i>his face fell</i> . | (TNK: Gen. 4: 5) | |

引用するヘブライ語文はその下に英語の逐語訳を()内に付す。逐語訳ではハイフンで結ばれている語句は、原則としてヘブライ語では1語であること、接辞と基語(base)で構成されている語であること、主語の明示が無い動詞に附加した代名詞であること等を示す。また、[]内の語句は、ヘブライ語には無いが英訳に際して附加した語句であることを示す。逐語訳の下には、欽定訳聖書(AV)の訳を引用する。欽定訳聖書には原典に忠実な訳が多いためである。さらにその下にはヘブライ語文の解釈を明確にするために、必要に応じて、現代英語訳聖書の訳を引用することがある。

ヘブライ語文(1)はAとBの2つの文から成っており、2つの文は類似の概念を表す。これはヘブライ語聖書の文体的特徴の一つであり、平行体(parallelism)と呼ばれる修辞法である。以下、AとBは平行体を構成する文または句であることを示す。ヘブライ語聖書には平行体を用いて物語を展開させる修辞法が頻出している(橋本, 1998: 227-34)。例文(1)で注目すべきはBにある表現 **וַיַּפְלֹּן פָּנָיו** (*his face fell*) である。これはAにある動詞 **מִאָרֶךְ** (*anger was kindled*) を言い換えた表現である。「怒った」という心理状態は抽象的な経験であり、具体的な構造を持っていない。しかし我々は「上下」などの空間概念を比喩的に転用することによってそれを構造化している(Lakoff and Johnson, 2003: 14-21)。人間に限らず広く生物は、気持ちが沈んだ時には頭が垂れ、うつむいた姿勢になり、時には倒れ、ついに床に伏す。つまり「下」は、一般的には、「好ましくないこと」を暗示する方向である⁷。このように心理状態と身体的な経験とが共起するがゆえに **BAD IS DOWN** (*ibid.*: 16) という概念メタファーが成立し、**וַיַּפְלֹּן פָּנָיו** (*his face fell*) にマイナスの感情を読み取ることを可能にさせている。ここでは怒りの矛先は神であるために、抵抗をすることはできずに塞ぎ込んでいる感情のイメージが **וַיַּפְלֹּן פָּנָיו** (*his face fell*) で表現されている。

| | | | |
|------|--|---|--------------|
| (2) | וְתַשְׁאַל־אֱלֹהֶת פָּנִיךְ | כִּירָא עַל־שְׁדֵי תְּחֻנֵּן | (Job 22: 26) |
| | B | A | |
| | (and you lift up to god face-of-you) | (for then to almighty you shall take exquisite delight) | |
| (2') | For then shalt thou haue thy delight in the Almighty, and shalt lift vp thy face | | |

⁷ 「下」が「死」を暗示するメタファーとして「砂を噛む」(*Ps. 72: 9*) (AV: and his enemies shall *lick the dust*.) がある。戦いに敗れた人は地に倒れ、その光景が砂を噛んでいるように見えたことから生まれた表現だと思われる。

vnto God.

(AV, Job 22: 26)

一方、喜ばしいことに対しては、姿勢は上向き、行動は活発になる傾向が強い。つまり「上」は「好ましいこと」という方向のイメージを立ち上げる。このような経験が *HAPPY IS UP* (*ibid.*: 16) という概念メタファーを生み出す。これによって、**חָנַךְ פָּנִיךְ** (you lifted up your face) はプラスの感情を示す表現であると解釈することができる⁸。

いつの時代でも、どの文化であっても、書き手と読み手は〈人間〉であるということに搖らぎはない。人間であるがゆえに共有する身体経験が「方向性のメタファー」を心理的実在として我々の中に宿しているのである。

3.1.2. 事例 2— *bare you on eagles wings/ under the shadow of thy wings*

次に「内」と「外」に関わる表現について考察する。我々は体の表面を衣服で覆うことで寒暖の調節をし、雨が降れば雨宿りをし、大切なものは金庫に収納して保管するなど、一般的に、「内」に対しては「安全」や「保護」、「外」に対しては「危険」や「危機」というイメージを抱く。つまり *WITHIN IS SAFE, WITHOUT IS DANGER* という概念メタファーを所有しているのである。

(3) **אַתֶּם רֹאִיתֶם אֲשֶׁר עָשִׂיתִי לְמִצְרִים וְאֵשָׁא אֲתֶכֶם עַל־כָּנְפֵי נֶשֶׁרִים**
 B A (Ex. 19:4)

(and-[how]-I-carried you under-wings-of eagles) (you saw what I did to-[the]-Egyptians)

(3') Ye haue seene what I did vnto the Egyptians, and how I *bare you on Eagles wings*,
 (AV, Ex. 19:4)

例 (3) の文 B は単に **אתכם** (you = 妻) がどこに位置しているのかを陳述している文ではない。妻を「鷲の翼の下」に入れるという表現は、*WITHIN IS SAFE* という概念メタファーを介することによって、「鷲の翼」を「盾」として解釈することが可能になる。「鷲の翼の下」に隠すことを概念メタファーに照らし合わせることによって、隠されたものを保護するという意味が導き出されるのである。そこから、(3) は安全を確保している様子を描いた一節であると解釈することが可能になる。例 (4) と (5) のように **בְּצֶל כָּנְפֵיךְ** 「翼の影」も「保護」の意味で用いられることがある。

(4) **שְׁמַרְנִי בְּאִישׁוֹן בְּתַעַזְן בְּצֶל כָּנְפֵיךְ תִּסְתִּירְנִי** (Ps. 17: 8)
 B A
 (in-shadow-of wings-of you hide-me) (keep-me like [a] little-man [a] daughter-of [the] eye)

⁸ 「上を向かない」 (Job 10:15) (AV: yet will I *not lift vp my head*; I am full of confusion) という表現もある。

- (4') Keepe me as the apple of the eye: *hide mee vnder the shadowe of thy wings,*
 (AV, Ps. 17: 8)

(5) **וּבְצִלְכָּל בְּנֵפֶיךְ אַרְגֵּן** (Ps. 63: 7)
 B A

(and·in·/the·shadow·of wing·of·you I·will·give·[a]·cry [in joy] (because·you·are help·to·me)

- (5') Because thou hast bene my helpe; therefore *in the shadow of thy wings* will I
 rejoyce. (AV, Ps. 63: 7)

3.1.3. 事例3— *into your hand / under the hands / in the hand of / by the hand of*

次に概念メトニミーによって解釈の枠組みが与えられている例を見てみよう。

(6) **וְלֹא־חָלַל בָּה יָדִים**

(Lam. 4: 6)

(and·not·were·turned toward·her [the] hands)

(6') and no *hands* stayed on her.

(AV, Lam. 4: 6)

(6'') With no *hand* to help her!

(NKJ, Lam. 4: 6)

例(6)の「手」(hand)は「助けてくれる人」の意味である。類似の意味拡張は現代英語でも We are short of *hands*. (手が足りない) / We need more *hands*. (手が要る)のような表現で観察される。時代と文化と言語を超越したこの一致は、〈人間〉の生活様式に存在する共通項に起因している。つまり、人間の活動は概して「手」を使って遂行されることが多く、認知的に優位に立つ「手」を参照点として選択し、空間的な共起関係によって「活動を行う人」や「活動」そのものを指示するというメトニミーによる解釈が働いている。これが一般化されたものが概念メトニミー *THE HAND STANDS FOR THE PERSON*と *THE HAND STANDS FOR THE ACTIVITY* (Kóvecses, 2002: 208-9) である。例(6)の「手」(hand)には、「人を助けるという活動」と「それを行う人」という両方の側面があり、それらが概念レベルで統合されることによって、適切な解釈が生み出されるのである。(6'')の現代英語訳ではこのことを考慮して、説明的な訳になっている。

(7) **בְּיָדְכֶם נָתַן**

(Gen. 9: 2)

(into·*hand*·of·you they·are·delivered)

(7') into your *hand* are they deliuered.

(AV, Gen. 9: 2)

(7'') They are all placed under your *power*

(GNB, Gen. 9: 2)

(8) **שְׁשָׁה עַל יָדֵי אֲבִיהֶם יְדוֹתָיו**

(1 Chr. 25: 3)

(six under *hands*·of [the] father·of·them Jeduthun)

(8') sixe, vnder the *handes* of their father Ieduthun,

(AV, 1 Chr. 25: 3)

(8") six, under the *direction* of their father Jeduthun, (RSV, 1 Chr. 25: 3)

(9) דָוִד אֶחָד הַכְלִים מֵעַל־יָד שׁוֹמֵר הַכְלִים (1 Sam. 17: 22)

(and-left David carriages-of him from-upon-him in-[the]-*hand*of [the]-keeper-of carriages)

(9') And Dauid left his cariage in the *hand* of the keeper of the cariage,

(AV, 1 Sam. 17: 22)

(9") David left his things in *charge* of the quartermaster, (NEB, 1 Sam. 17: 22)

(10) וַיִשֶּׂם יְהוֹיָדָע פָקְדָת בֵית יְהוָה בְּיַד הַכֹּהֲנִים הַלְוִיִּם (2 Chr. 23: 18)

(and-put Jehoiada officers-of [the] house-of Yahweh in-[the]-*hand*of the-priest the-Levites)

(10') Then Jehoiada committed the supervision of the house of the Lord to the
Charge of the priests and the Levites (AV, 2 Chr. 23: 18)

例(7) - (10) は **手** (hand) が比喩的に用いられた例である。これらの解釈には、先に見た概念メトニミー *THE HAND STANDS FOR THE ACTIVITY* が深く関わっている。「手」は上位概念である人間の意志に動かされて活動を遂行しているという側面に意識を向けることによって *THE HAND STANDS FOR CONTROL* (*ibid.*: 208-9) という概念メトニミーが成立する。例 (7) - (10) の解釈には後者の概念メトニミーが直接貢献している。これを明確にするために (7") - (9") の現代英語訳聖書および (10') の欽定訳聖書では説明的な訳が与えられている。この概念メトニミーを介することによって、**手** (hand) はそれぞれ「権力」、「指揮」、「管理」、「指示」の意味を拡張させていったと考えられる。これらはいずれも *CONTROL* (統制) という概念と結びついている。

3.1.4. 事例 4 — *vessel*

ここでは「人間」を意味する表現を考察する。

(11) הַעֲצָב נִבְזָה נִפְזֵץ הָאִישׁ הַזֶּה כְּנִיחָזֶב אֶסְפֵּלִי אֵין חַפֵּץ בּוֹ

B

A

(or-[is he a] vessel without pleasure in-it?) (?-the pot despised broken the-man this Coniah [is])
(Jer. 22: 28)

(11') Is this man Coniah a despised broken idole? is hee a vessell wherein is no
pleasure? (AV, Jer. 22: 28)

(11") Is this man Coniah a despised broken vessel? is he a vessel wherein none
delighteth? (ASV, Jer. 22: 28)

例 (11) では、A の述部 pot despised broken の概念は B の vessel without pleasure in it (vessel without pleasure in it) で繰り返されている。このように、同一概念を表す述部だけ

を繰り返す手法も平行体の一種である。A の述部にある בָּצָבָה は一般的には土で作られた壺を表すが、ここでは人間を指している。この בָּצָבָה に対応する B の語は בָּנָה である。この語は一般的には土以外の材料で作られた壺を表すが、A の בָּצָבָה と同様に人間を指している。起点領域の〈壺〉と目標領域の〈人間〉との間に何らかの類似性がなければメタファーは機能しない。壺のどのような側面が人間に投影されているのであろうか。

| 〈壺〉 | 〈人間〉 |
|----------------------|------------------|
| 1. 木材、土などでできた 1 つの固体 | ↔ 皮膚に覆われた 1 つの固体 |
| 2. 物を収容できる固体 | ↔ 能力や感情を内に秘めた固体 |

人間も壺も「内」と「外」からなる 1 つの固体である。内部に「物を収容する」という壺の側面が、「能力や感情を内に宿す」人間へと写像されている。つまり、人間も壺と同じく「容器」に見立てられているのである。

人間を容器に喻えるメタファーはしばしば日本語および英語でも観察される。

- 3. 「器の小さい人」
- 4. 「弱き器」 (≒ a weak vessel)
- 5. a leaky vessel (秘密を守れない人)
- 6. Empty vessels make the most sound. (頭が空な人ほどよくしゃべる)

これらはいずれも人間を容器に見立てている。これはある程度普遍的な解釈 (construal) であると思われるが、これまで見てきた事例に比べて生産性が高いとは言えず、概念メタファーと呼ぶことができるかどうか疑問が残る。しかし、人間である我々が身体的経験を基盤として獲得した解釈の枠組みであることには変わりはない。先に述べたようにこれは人間であるがゆえに文化を越えて共有されるものであり、これらを用いた表現には言語と文化の相違を横断する普遍性が認められる。

3.2. 文化的要素が深く関わる事例

言語は経験映像的なものである (菅原, 1987: 52)。一般に言語表現は、どのような環境に身を置き、そしてその中でどのような経験をしているかということと密接に関わっている。何かを言葉で表現する時、脳裏にそれを表すイメージが立ち上がり、記憶に貯蔵された経験に基づくイメージと「照らし合わせ」の作業を行い、それを基にして新しい表現が生み出される。このようなプロセスを経ない表現は単なる「記号同士の符号化」に過ぎず (*ibid.*: 52)、相手の心に響く独創的な表現にはならない。このイメージは文化によって動機付けられていてるために、現代に生きる我々が聖書を読み解く際に大きな障害になる可能性がある。ここではいくつかの表現を取り上げ、メタファーとメトニミーとの視点から文化特有の世界観と言語表現を考察する。

3.2.1. 事例5— *bowels*

ヘブライ語の単語 **מעה** は複数形 **מעיים** で内蔵 (bowels)を表すが、「生殖器」、「子宫」、「腹」、「心」、「悲しみ」など様々な意味も表す。これにはどのような世界観が反映されているのだろうか。その謎の出発点はやはり〈人間〉という存在である。前節で見たように、人間を能力や感情を納めた容器と見なす捉え方がなされるとするならば、当然その内部にも興味と関心が向く。

(12) **אֲשֶׁר יִצָּא מִמְעֵיךְ**

(Gen. 15: 4)

(he who shall come from *bowels* of you (= Abraham))(12') he that shall come foorth out of thy owne *bowels*,

(AV, Gen. 15: 4)

ヘブライ語では、概して、対象を細分することなく上位概念や総称的な語によって表現する傾向が強い。その結果、カテゴリーに属するものの典型性 (prototypicality) やコンテクスト、さらには経験的に蓄積した百科事典的知識によってその意味が特定されることになる⁹。(12) で使用されている **מעה** (bowels) は実際に体の一部を構成する具体的な部分であり、メトニミーの作用によってこの語の解釈が可能になる。ここでは男性である Abraham の **מעיים** (bowels) から人間が「外の世界へ出てくる」というイメージが、「人間の誕生」に関する百科事典的知識を脳裏に立ち上げ、それを基に **מעיים** (bowels) の意味が「男性の生殖器」に特定される¹⁰。

(13) **מַעַי אָמֵן הַזֹּכִיר שְׁמִי****יְהוָה מִבְטָן קָרָא נִ**

(Isa. 49: 1)

B

A

(from bowels of mother-of-me remembered name-of-me) (Yahweh from [the] belly recalled me)

⁹ カテgorieおよびその典型例は文化的要素の影響を受けるので、解釈に際しては注意が必要。例えばヘブライ語で **sea monster** (sea monster) はラテン語訳聖書 Vulgate ではヘブライ語に忠実な訳 *cete grandia* であるが、Vulgate から間接訳された古英語訳聖書や原典から直接訳された欽定訳聖書ではこの語をイギリス人にとつて昔から馴染みがある「鯨」に特定されている。総称語を特定語で訳した例である。

HEBREW BIBLE : **וַיַּבְרֵא אֱלֹהִים אֶת־הַתְּנוּנִים הַגָּדוֹלִים**
(and-created God the sea-monsters the big)

VULGATE : Creavitque Deus *cete grandia*OE HEPTATEUCH : God gesceop da *miclan hwalas*

AUTORIZED VERSION : And God created great whales (Gen. 1: 21)

また、エデンの園にある **פְּרִי עֵץ** (fruit tree) は、ラテン語訳聖書 Vulgate ではヘブライ語に忠実な訳 *lignum pomiferum* であるが、Vulgate から訳された古英語訳聖書では、イングランドで身近な果物の木である「林檎の木」と訳されている。

HEBREW BIBLE : **עֵץ פְּרִי** (tree-of fruit)VULGATE : *lignum pomiferum* (tree fruit-bearing)OE HEPTATEUCH : *æppelbære treow* (apple-bearing tree) (Gen. 1:11)

総称的な語が生活に密着した身近な特定語で訳された例である。

¹⁰ 「お父さんから生まれた」という表現は、全体で部分を表すメトニミーが作用し究極的には「男性の生殖器」を指すが、通常この詳細なイメージは喚起されない。**מעה** (bowels) も同様である。

- (13') The Lord hath called mee from the wombe, from the bowels of my mother
hath he made mention of my name. (AV, Isa. 49: 1)

例(13)には「お腹」と「内蔵」を意味する2つの異なる語が平行体を構成する文AとBで使用されている。Aでは総称的な意味で**בטן**(belly)が単数形で使用され、Bでは**בטן**(belly)よりも包括的で総称的な意味を表す**מעי**(bowels)が使用されている。この語は(12)で引用した語で、複数形である。**בטן**(belly)は「お腹」を表すが、「お腹」の中にある「子宮」や「内蔵」も指すことができる。**בטן**(belly)と**מעי**(bowels)は、いずれも、コンテクストの作用によって「胎内」あるいは「子宮」であると特定することが可能になる。

- (14) **מַעַי מַעַי אֲחֹולָה קִרְוֹת לְבִי**
 B A (Jer. 4:19)

(growl to-me heart-of-me) (*bowels-of-me bowels-of-me I-writhe walls-of heart-of-me*)

- (14') *My bowels, my bowels*, I am pained at my very heart, my heart maketh a noise
in mee, (AV, Jer. 4:19)

- (14") My anguish, my anguish! I writhe in pain! Oh, the walls of my heart! My heart is beating wildly; (RSV, *Jer. 4:19*)

例(14)のAにある¹⁴ **בָּבֶן** (my bowels)は、その後方に置かれた¹⁵ **לִבְבֵי** (my heart)によって「心」と解釈することが可能になる。(14")の現代語訳聖書の訳ではこの語が“anguish”に置き換えられている。**בָּבֶן** (my bowels)は具体的な臓器そのものを指しているのではなく「感情」を指しているのである。普遍的ではないが、身体の重要な器官を「感情が宿る容器」と解釈する言語が多い(Sweetser, 1998: 45)。人間を「感情が宿る容器」とみなすメタファーが存在するがゆえに可能なメトニミーである。

3.2.2. 事例 6 — rock / manna / thy hand under my thigh / Sodom / Gomorrah / anoint

旧約聖書の神は絶対的な存在であり、「神のことば」には絶大なる力が宿っている。このような思想は当然ながら言語表現にも顔をのぞかせる。ここでは宗教色が強い表現を取り上げ、その動機付けを探る。

- יהוה צורי וגָלַי** (15) (Ps. 19:14)

(Yahweh rock-of-me and-redeemer-of-me)

- (15') O Lord my *strength*, and my redeemer. (AV, Ps. 19:14)

- (15") O Lord, my *rock* and my redeemer! (NEB, Ps. 19:14)

この世の万事は神によって提供されるものであるとする考えは、例えば “Only God knows.” “By the will of God”, “My future is in Your hands” といった表現に垣間見ることができる。これらは神に加護を求める表現であるが、そこには神を強靭な存在と見る思想が

反映されている。例(15)にある צור は rock, cliff, rocky wall を意味し、「近寄りがたい絶壁」、「敵からの隠れ場所」、「永続性」が認識されていた(荒井・石田, 1989: 118, 151)。このイメージが「神」へと写像されることにより、(15)の צור (rock) は רָאֵן (redeemer)、יהוָה (God) と同義を共有する語となっている。

神の加護がより具体的な「もの」として表現されている例を見てみよう。

(16) **וְמַנְנָךְ לֹא־מִנְנָתָ מִפְיָחָם**

(*Neh. 9:20*)

(and-manna-of you not-you-withheld from mouth-of them)

(16') Thou ... withheldest not thy *Manna* from their mouth, (AV, *Neh. 9:20*)

英語の語彙mannaは「天の恵み」「棚ぼた」と解釈されている。旧約聖書によれば、この語の起源と意味は次の物語に依拠する。モーセに導かれ、エジプトから脱出したイスラエル民族が荒野で飢餓に貧した時、神から贈られた食料、すなわち、「荒れ野の地表を覆って薄くて壊れやすいものが太地の霜のように薄く残っていた」(*Ex. 16:14*) のを見つけて、人々が“What is it?”(what [is] it [?]; *Ex. 16:15*)と発した。「イスラエルの家(=人々)はそれをマナ(manna)と名付けた」(*Ex. 16:31*)。このように旧約聖書では*Ex. 16:15*の疑問詞 “מה”(/ma:n/=what)を普通名詞化し、「荒れ野で食べたパン」(*Ex. 16:32*)、“daily food of Israelites in desert”(Clines, 2001, *vid.*, manna)の意味を与えた。普通名詞化されたこの “מה”(/ma:n/)は新約聖書のギリシャ語でμάννα (mánná; e.g., *John. 6:31*)とつづられた。それがラテン語に採用されてmannaになり、ラテン語から英語に入った。mannaはイスラエル民族を救ったこのエピソードを象徴する存在として捉えられ、「思いがけず手に入った有難い物」というスキーマを抽出することによってメタファーが機能し、「天の恵み」や「棚ぼた」という意味が定着したと考えることができる。

ただし Klein (1987: 354)によれば、上述の名詞 “מן”(<manna>)の起源については、語源学上、三種類の説がある。それらは、1) 古代エジプト語起源の「樹液」を意味する“mann”、2) アラブ語の霜を意味する“minn”、3) 旧約聖書では what に対応する一般的な疑問詞は מה(/ma:)であるが、*Ex. 16:15*で使用されたアモリ語またはアラム語起源の疑問詞 “מה”，である。

次に挙げる例は、儀式として実際に行う誓いを表現した文である。

(17) **שִׁים־נָא יָדְךָ תְּחַת יָרְכִּי**

(*Gen. 47: 29*)

(put please hand-of-you under thigh-of-me)

(17') put, I pray thee, thy hand vnder my thigh,

(AV, *Gen. 47: 29*)

例(17)の “שִׁים־נָא יָדְךָ תְּחַת יָרְכִּי”((please) put your hand under my thigh)は「子々孫々に誓う」という意味である。これは、個々の語の意味を足し合わせても推測しえない解釈である。その隙間を埋めるのが百科事典的な知識である。誓いを立てる者が、誓いを立てられる男性の恥部、つまり一族が生まれ出でてくる部分に手を置くことによって、「子々孫々に誓う」と

いうことを示す儀式を表現したものである (Davidson, 1988: 110)。実際に視界で捉えることができる「行為」を参照点とし、より抽象的な「行為の意味」を喚起させる表現である。これはメトニミーの作用によって可能になる解釈である。

解釈に旧約聖書の知識が要求される例を見てみよう。

(18) שְׁמַעוּ דְבָרֵי יְהוָה קָצִין סֶדֶם
 (hear word-of-Yahweh rulers-of Sodom)

(18') Heare the word of the Lord, ye rulers of *Sodom* (AV, Isa. 1:10)

(19) עַם עַמּוֹרָה
 (people-of *Gomorrah*)

(19') yee people of *Gomorrah*. (AV, Isa. 1:10)

سدם (Sodom) と עַמּוֹרָה (Gomorrah) は、共に、人々の墮落が原因で神によって滅ぼされた町の名前ある。この物語の「墮落」という側面が独り立ちをして他の領域に投影されると、(18) の קָצִין סֶדֶם (rulers of Sodom) が「墮落した指導者たち」を、(19) の עַם עַמּוֹרָה (people of Gomorrah) が「墮落した人々」を表すようになる。すなわち、Sodom と Gomorrah が「墮落」そのものを表すようになる。メタファーによって使用範囲が拡張された例である。

反対に権力の座に就く場面はどのように表現されているのだろうか。

(20) שָׁלֹח יְהוָה לְמַשְׁחֵךְ לְמֶלֶךְ עַל־עַמּוֹ
 (sent Yahweh to-anoint you to-be-king over-people-of-him)

(20') The Lord sent me to *anoint* thee to bee king ouer his people,
 (AV, 1 Sam. 15: 1)

例 (20) は儀式として国王を任命する場面を描いた文である。古代イスラエル社会では、尊敬する人や畏敬の念を抱く人には מַשְׁחֵךְ 「(上質のオリーブ) 油を注ぐ」という行為が行われていた。油を注がれた者は不可侵の存在で主の靈が降り (1 Sam. 10: 1, 6)、神聖が与えられた (Ex. 30: 29)。また、会見の幕屋や十戒の箱に油を塗り (Ex. 30: 26)、ダビデは自分の子が死んだ時自分の体に油を塗って祈った (2 Sam. 12: 20) 等の記述が旧約聖書にある (Clements, 1972: 197)。聖なる香油を用いて世俗的なものから聖別する意図があったためである (荒井・石田, 1989: 62-63)。本来 מַשְׁחֵךְ は「油を塗る、油を注ぐ」ことであるが、視覚的に捉えることができるこの行為を参照点とすることによって、より抽象的な「即位」、「聖化」という概念を喚起させている。これはメトニミーによる解釈が働いたためである。

3.2.3. 事例 7— right / left

「左右」は必ずしも対称的に概念化されているとは限らない。人間はそこに「意味づけ」を施し、優劣を表すひとつの指標にしている。古くは我が国の律令制の官位で「左大臣」と

「右大臣」とは異なる地位の官職であった。古代ヘブライ社会の「左右」に対する意味づけは次の通りである。太陽が昇る東に向かって立つと右手が南側になるが、それは幸運を表す方位とされていた (*ibid.*: 62-63)。そこから右には「幸運」、「強さ」、「優位」というイメージが付与された。「右」が「権力」や「強さ」を示している例が(21)である。

- (21) **ימינך יהוה נאדרי בכחך** (Ex. 15: 6)
 (right-hand-of you Yahweh [is] great in-power)
- (21') Thy *right hand*, O Lord, is become glorious in power, (AV, Ex. 15: 6)
- (22) **נצבה שגָל לִימינך בְכַחֲם אֶופִיר** (Ps. 45:10)
 (stands [the] queen on *right-hand-of-him* in *gold-of Ophir*)
- (22') vpon *thy right hand* did stand the Queene in golde of Ophir. (AV, Ps. 45:9)

古代ヘブライ社会において、王を中心としてその右側の座は、優位かつ名誉ある位置であった。この「強さ」や「優位」という概念が「王室」という領域に写像された表現が例(22)である。王の右側に位置する女性は王に次いで権力を保持していたと容易に想像されるため、「王妃になる」、「王の妻らしく振舞う」という解釈が導き出されるのである。

3.2.4. 事例8— *sandal / shoe*

旧約聖書の世界で「靴」には独特な意味づけが施されている。まずは「靴」が「認証」を象徴する存在であったことを見てみよう。

- (23) **קָנָה־לֵך וַיַּשְׁלַח נַעַלֹו** (Ruth 4: 8)
 (buy [it] to-you and-he *took-off sandal-of-him*)
- (23') Buy it for thee: so he *drew off his shooe*. (AV, Ruth 4: 8)

かつてイスラエルでは、親族としての責任や権利の履行および譲渡にあたって一切の手続きを認証するために、当事者が自分の靴を脱いで相手に渡すという習慣があった (Tregelles, 1980: 554)。例(23)は、「靴を脱ぐ」という行為によって権利の譲渡、つまり「売る」ことを意味しているのである。視界にくっきりと捉えることができる「行為」を参照点に選択し、その行為が意味することを暗示しているためにメトニミーによる解釈が働いたということができるよう。

- (24) **יבְמַתּו ... וְחַלְצָה נַעַלֹו מַעַל רַגְלוֹ** (Deut. 25: 9)
 (sister-in-law-of-him ... and shall *pull-off sandal-of-him from foot-of-him*)
- (24') Then shal his brothers wife ... *loose his shooe from off his foote*, (AV, Deut. 25: 9)

例(24)で「靴を脱がせる」ということは、メタファーによる思考を介して「責任・権利の履行」を象徴する「靴」を取り上げることであり、そこに「権利を剥奪する」という読みを与えているのである。

(25) עַל־אֶדוֹם אֲשֶׁלֵיךְ נָעַלְיָה

(over-Edom I-will-cast shoe-of me)

(25') ouer Edom wil I *cast out my shooe:*

(AV, Ps. 60: 8)

(25'') I will throw my sandals on Edom, *as a sign that I own it* (GNB, Ps. 60: 8)

例(25)では靴が「権利」の1つである「所有権」を意味している。「ある土地に靴を投げる」ということは、その土地を手に入れることを意図しているのである。新しい領地に「足を踏み入れる」という経験が基盤になっていると思われる。このことから「靴を投げ」、靴が落ちた場所が「自分のものになる」という解釈が生まれる。(25'')の現代英語訳聖書の訳では、この「所有」という古代ヘブライ語表現の理解を助けるために、解説的な句“*as a sign that I own it*”が付加されている。

3.2.5. 事例9— *cover one's feet*

ここで見る例は、解釈に際し中東における衣服の知識が必要となる表現である。

(26) אָקֵד מִסְיךְ הַוָּא אֲתִידְגַּלְיוֹ

(surely covers he feet-of him)

(26') Surely he *couvereth his feet.*

(AV, Judg. 3-24)

(26'') He must *be relieving himself*

(NEB, Judg. 3-24)

例(26)は、古代パレスチナ地方で一般的であった丈の長い服を身につけた人が、「用を足す」ためにしゃがんでいる場面を言語化したものである。「用を足す」ために膝を折り曲げ身をかがめると長い衣服の裾が「足」を覆い隠す。この「足を覆い隠す」ことが行為全体を想起させるので、「足を覆い隠す」という表現が「用を足す」の意味を表すようになった。メトニミーという認知過程に文化的知識が深く関与している例である。この知識を持ち合わせていない読者が理解できるように、(26'')の現代語訳聖書では原典の表現が意訳されている。

3.2.6. 事例10— *put my life in mine hand*

3.1.3.では概念メトニミーが関わる **¶** (hand) を考察したが、ここではヘブライ語に見られる文化独特の世界観が生み出す **¶** (手の平) の解釈を見てみよう。このヘブライ語の単語は英訳聖書では *hand* と訳され、日本語訳聖書『聖書 新共同訳』では「手」と訳されている場合が多いので注意を要する。

| | | | |
|--|---|-----------------------------------|------------------|
| (27) | וְנֶפֶשִׁי אֲשֵׁם בְּכַפֵּי | אָשָׁא בְּשָׁרִי בְּשָׁנִי | (Job 13: 14) |
| | B | A | |
| (and life-of-me I-will-put in-the-palm-of-me) (I-will-take flesh-of-me in-teeth-of-me) | | | |
| (27) | <u>doe I take my flesh in my teeth, and put my life in mine hand?</u> | B | (AV, Job 13: 14) |
| (27') たとえこの身を自分の歯にかけ 魂を自分の手に置くことになってもよい。 | | | |
| (『聖書 新共同訳』 Job 13: 14) | | | |

例えば「手の平で転がす」や「手の平を返す」に見られるように、日本語で「手の平」は「制御」や「意思」を表すことが多いが、ヘブライ語では「不安定」や「滑り落ちる危険性」というイメージが付与されている。これにより「我が身を自分の手の平に置く」という表現は「危険を冒す」という意味に解釈される。例(27)は文Aと文Bで平行体を構成しており、Aの「歯の間に体を置く」の概念はBの「我が身を自分の手の平に置く」で繰り返されている。口にくわえたものも、手の平に置かれたものも、ちょっとした弾みで落下する危険性がある。そういう空間に身を置くということは結局「命を危険にさらす」ことを意味するのである。このようにヘブライ語では「手の平」と「歯の間」に「不安定な危険な箇所」という独特的の意味づけが施されているのである。その結果、例(28)のヘブライ語表現(*in my palm*)は、(28')の現代英語訳聖書の訳に示されているように、*in danger*の意味になる。

| | | |
|---|---|--------------------|
| (28) | נֶפֶשִׁי בְּכַפֵּי חַמִּיד | (Ps. 119:109) |
| (soul-of-me [is] <i>in-palm-of-me</i> always) | | |
| (28') | My soule is continually <i>in my hand</i> | (AV, Ps. 119:109) |
| (28'') | my life is always <i>in danger</i> , | (TNK, Ps. 119:109) |

4. 結語

本稿では、時代を超えて理解が可能な概念メタファーおよび概念メトニミーによる表現と、文化的色彩を強く帯びているがゆえに理解が困難になる表現を探り上げ、メタファーとメトニミーの観点から分析を行った。聖書に散りばめられたこれらの存在は、生き生きとしたイメージの喚起を促すと同時に、その意図と解釈を読み手に委ねるために、鮮やかな描写でありながら多様な解釈を強いる一因となっている。従来、メタファーとメトニミーは主に文学や弁論術で用いられる「言葉の飾り物」であると見なされてきた。しかしこれまで見てきたことに加え、例えば「進路を決める」という意味の **וְאָפַנָה עַל־יָמִין אוֹ עַל־שְׂמָאל** (Gen. 24:49, AV: I may turne to the right hand, or to the left.) という表現を考察してみると、*stand at the crossroads* や「岐路に立つ」と同様、複数の分かれ道を前にしてどちらに進むかという選択を迫られたことを描写する表現であり、概念レベルですでにメタファーの作用が働いていることは明らかである。メタファーやメトニミーの生命力はこの概念レベルで機能する根本性に求めることができよう。人によって口承され、後に文字化された聖書を認知言語学的に読み解く鍵は、概念を構築する〈人間〉にあるという主張の論拠はここにある。

I. 参考文献

- 荒井献・石田友雄 (eds.) (1989) 『旧約・新約聖書大事典』 東京：教文館
- Chafe, W. L. (1968) "Idiomaticity as an anomaly in the Chomskyan paradigm," *Foundations of Language*. 4. 109-125.
- Clements, R.E. (1972) *The Cambridge Bible Commentary: New English Bible, Exodus*. (General eds. Ackroyd, P.R.C., A.R.C. Leaney & J.W. Packer) Cambridge: C.U.P.
- Clines, David J. A. (ed.) (2001) *The Dictionary of Classical Hebrew*. V vols. Sheffield: Sheffield Academic Press.
- Davidson, R. (1973) *The Cambridge Bible Commentary: New English Bible, Genesis 1-11*. (General eds. Ackroyd, P.R.C., A.R.C. Leaney & J.W. Packer) Cambridge: C.U.P.
- (1988) *The Cambridge Bible Commentary: New English Bible, Genesis 12-50*. (General eds. Ackroyd, P.R.C., A.R.C. Leaney & J.W. Packer) Cambridge: C.U.P.
- Fraser, B. (1970) "Idioms within a transformational grammar," *Foundations of Language*. 6. 22-42.
- Gottwalt, N. K. (1987) *The Hebrew Bible: A Socio-literal Introduction*. Philadelphia: Fortress Press.
- 橋本功 (1998) 『聖書の英語とヘブライ語法』 東京：英潮社
- (2005) 『英語史入門』 東京：慶應義塾大学出版会
- Klein, E. (1987) *A Comprehensive Etymological Dictionary of the Hebrew Language for Readers of English*. London: Collier Macmillan.
- Kövecses, Z. and G. Radden (1998) "Metonymy: Developing a Cognitive Linguistic View," *Cognitive Linguistics*. 9: 1. 37-77.
- Kövecses, Z. (2002) *Metaphor: A Practical Introduction*. Oxford: O.U.P.
- Lakoff, G. and M. Johnson (2003) *Metaphors We Live By With a New Afterword*. Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1993) "Reference-Point Constructions," *Cognitive Linguistics*. 4. 1-38.
- 成瀬武史 (1996) 『翻訳入門 原文の解釈から訳文の構想まで』 東京：研究社
- Newmeyer, J. F. (1972) "The insertion of idioms," *Papers From The Eighth Regional Meeting Chicago Linguistic Society*. Chicago Linguistic Society. 294-302.
- 菅原俊也 (1987) 『英語言語研究序説—語の認識の可能性と多様性—』 東京：三修社
- Sweetser, E.E. (1998) *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure*. Cambridge: C.U.P.
- Taylor, J. (2002) *Cognitive Grammar*. Oxford: O.U.P.
- Tregelles, S.P. (Trans) (1980¹⁴) *Gesenius' Hebrew and Chaldee Lexicon to the Old Testament Scriptures*. Michigan: WM. B. Eerdmans Publishing Company.

II. 引用した聖書

A. ヘブライ語聖書

Biblia Hebraica. (ed.) R. Kittel. Stuttgart: Deutsche Bibelstiftung. 1977.

B. ギリシャ語新約聖書

The Greek Testament. (ed.) H. Alford. Boston: Lee and Shepard. 1873.

C. ラテン語訳聖書

Vulgate = *Biblia Sacra Iuxta Vulgatam Versionem.* 2 vols. (ed.) R. Weber. Stuttgart: Württembergische Bibelanstalt. 1969.

D. 英訳聖書

ASV = *American Standard Version = The Holy Bible, Containing the Old and New Testaments, Translated out of the Original Tongues, Being the Version Set Forth A.D. 1611, Compared with the Most Ancient Authorities and Revised A.D. 1881 - 1885, Newly Edited by the American Revision Committee A.D. 1901.* New York: Thomas Nelson & Sons. 1901.

AV = AUTORIZED VERSION = *The Holy Bible, Contayning the Old Testament, and the New: Newly Translated out of the Originall tongues: & with the former translations diligently compared and reuised by his Maiesties speciall mandment. Appointed to be read in Churches.* (1611) London: Robert Barker. (Repr.) With an introduction by A. W. Pollard and illustrative documents. London: at the University Press. 1911.

GNB = *Good News Bible: The Bible in Today's English Version.* (ed.) R.G. Bratcher. New York: American Bible Society. 1976.

NEB = *The New English Bible with the Apocrypha.* (ed.) C. H. Dodd. Oxford : OUP and Cambridge: CUP. 1970.

NKJ = *Holy Bible: The New King James Version: Containing the Old and New Testaments.* Nashville: Thomas Nelson. 1982.

OE HEPTATEUCH = Ælfric's Heptateuch = *The Old English Version of the Heptateuch: Ælfric's Treaties on the Old and New Testament and His Preface to Genesis.* (ed.) S. J. Crawford. 1922. EETS. OS. 160; (repr.) 1969.

RSV = *The Holy Bible: Revised Standard Version.* The Division of Christian Education of the National Council of the Churches of Christ in the U.S.A. 1952.

TNK = *TANAKH The Holy Scriptures: The New JPS Translation According to the Traditional Hebrew Text.* Philadelphia, Jerusalem: The Jewish Publication Society. 1985.

E. 日本語訳聖書

『聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき』日本聖書教会. 東京：共同訳聖書実行委員会. 1989.